

非正規であることの男女差

— 従業の地位とメンタルヘルス —

東北学院大学 片瀬一男

1. 目的

バブル経済の崩壊から 25 年がたち、いわゆる「ロストジェネレーション」でも初期の者は、40 代から 50 代を迎えようとしている。学卒後、非正規雇用で就労した場合、そこからの脱出困難性ゆえに、近年は中高年の非正規労働者の増加が著しい。労働力調査（総務省 2016）によれば、1990 年から 2015 年にかけて、35 歳から 44 歳の非正規雇用率は 20.9%から 29.6%へと増加している。このなかには「パート主婦」も含まれるが、2015 年時点で 35 歳から 44 歳の非正規労働者のうち男性は 18.6%を占める。本報告ではこうした男性の非正規労働者のメンタルヘルスについて分析を行う。というのも、「男性稼ぎ手モデル」（大沢 2002）のもとでは、非正規雇用の男性が「スティグマ化」され、メンタルヘルスを悪化しやすいと考えられるからである。

2. データと方法

データは 2010 年～2011 年に首都圏で行われた多目的共用パネル調査の J-SHINE（The Japanese Study of Stratification, Health, Income, and Neighborhood）の第 1 ウェーブデータ（N=4,381）を用いる。メンタルヘルスに関しては、抑うつ傾向（ディストレス）を測定する K6（Furukawa et al, 2008.）を用いた。

3. 結果

K6 で測定した抑うつ傾向について、男女別に従業上の地位による差異をみたところ、男性においてのみ有意差がみられ、男性の非正規雇用者は正規雇用者に比べ抑うつ傾向が強かった。この結果は、国民生活基礎調査の分析結果（鶴ヶ野・綿谷 2011）とも合致する。そこで、抑うつ傾向を従属変数とし、年齢・性別（男性ダミー）・職業ダミー・従業上の地位（非正規ダミー）を独立変数とした重回帰分析を行うと、年齢や職業をコントロールしても、男性であることが抑うつ傾向を有意に高めていた。また両者の交互作用項を入れると、これも有意になったことから、当初の仮説、すなわち非正規雇用の男性は、「男性稼ぎ手モデル」から逸脱しているために「スティグマ化」されやすく、正規雇用の男性よりも抑うつ傾向が強いことが明らかになった。ただし、男性ダミー・非正規ダミー・年齢からなる交互作用項は有意にならず、男性が非正規雇用であることは、年齢が上がるにつれ、メンタルヘルスを悪化させていることにはなっていない。

4 考察と結論

A. ホネット（Honnet 1992=2003）は、人々が承認を求める 3つの領域の 1つに「社会的価値評価」—労働の領域における「個人的業績」に対する評価をあげ、それが「賃金が与えられるとともに社会的にまともなものと見なされるような労働に従事する機会の有無と結びついている」（Honnet 2000=2005:113）ことを強調する。その一方で、彼は労働市場の周辺とりわけ長年にわたって失業や非正規労働に追いやられる「存在を構造的に否認された人々」がいることに注意を喚起する。とくに「男性稼ぎ手モデル」が強固な日本社会では、非正規雇用を継続する男性は、労働市場という社会的価値評価の領域で「存在を構造的に否認」されることで「スティグマ化」されるために、メンタルヘルスの悪化を招来しやすいと考えられる。

【付記】

図表および文献は当日、配布する。なお、本研究は平成 21～25 年度文部科学省科学研究費新学術領域研究「現代社会の階層化の機構理解と格差の制御：社会科学と健康科学の融合」（代表：川上憲人東京大学大学院医学系研究科教授）によるものである。データの使用にあたっては、2014 年「社会階層と健康」研究班データ管理委員会の許可を得た。